
僕と幽霊少女と墮落日和

ゆんゆん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幽霊少女と墮落日和

【Nコード】

N4301Y

【作者名】

ゆんゆん

【あらすじ】

中学時代に”天才”とよばれ慕われてきた本城唯香は、高校に入って変わってしまった。僕は何もすることが出来ずただ見守るのしか出来ないのだろうか。

本城唯香というクラスメイトがいる。

成績優秀。運動神経抜群。クラスに存在しているか存在していないか果たして認識されているのかわからないくらいに存在感の薄い僕とは比べものにならないくらい存在感があり、性格のよさから周りから慕われる明るいクラス委員。まあこれは中学までの話だが。これこそが本城唯香という人間の本質だったような気がする。

そんな彼女が変わったのはいつだったろうか？

僕の記憶が正しいのならば高校に入学した頃だったように思う。何が原因なのかは僕にはわからないけれど、とにかく変わったのはその時だった。

内気で暗い、前とは全く正反対の性格になったようだった。

高校に入学してしばらくたってから、彼女は不登校になった。

002(前書き)

ちよくちよく内容が更新されているかもしれません。

「てなわけでつ、本城さんち行くの頼んだ!!」

何がてなわけで、だよ…。そんな満面の笑みで頼み事されても僕は引つかからないから。

何故か僕が不登校の本城の家を訪問する重大任務を任されたのだった。

まあ何故こんな事になったかって言う話から始めるとする。

入学式から数日後、一人のクラスメイトが学校へ来なくなった。所謂、不登校なわけだ。

そのクラスメイトがなんで不登校になったかは僕は知らない。

どうしようもなくグレてしまったのかもしれないし、はたまた新しい環境になれることが出来なかったのかもしれない。

後者はともかく、前者に限って本城にはありえない気がするけど。

中学時代の彼女は所謂優等生。僕なんかそれと比べればカスのようなものだ。

まあ、それがあっての前者である。という、可能性もありえなくはない。

高校生というのは厳しいものだ。

中学生と違い義務教育じゃないから、何日か休んでいると出席日数が足りなくなり、最悪留年になってしまうところが高校の怖いところ。それで担任が動いたのだった。

動くと言っても実際に行動するのは僕らクラス委員。僕らが奔走してる時、担任は優雅に職員室で紅茶でも飲んでいるのだろう。

僕の担任は自己中を絵に描いたような人間なのだ。

まったくとんだ担任である。

「僕が行かないとなのか？別に相手が男子なら問題ないけど…。女子の家だろ…？」

「え…、聖君、変な妄想してるでしょ。聖君のヘンタイ…っ」
「違う！断じて違う！」

「そいうめんどくさいことしたくないから。それにさ聖君の家、本城さんちに近いんでしょ？」

「それとこれとは別だし、まずめんどくさいとかお前な…」

「いーじゃない。どうせ暇なんでしょー？私は今日家に帰ってPCやらなきゃなの」

…っってお前も暇だろ、絶対に。

「ってことで、じゃあね」

八城メイ。僕のクラスメイトにして僕の天敵にして僕と同じクラス委員である。

とにかくこいつ外見だけは上の上と言えるくらいの美人で、人気者だ。

本性を知らないやつ全員は全員彼女に出来るものならしてみたいと言っただろう。

僕は勿論こんなやつ無理だ。

女子にも本性をあらわにしているようなので、嫌われているようだ。天敵という件は、なんだかんだで僕に妙なくらいに絡んできて（女子には嫌われているから何故か僕に絡んでくるのだ）、なんでもない僕を委員に推薦し、見事僕を男子のクラス委員長にさせたからだ。僕はそんなことやる気なかったし、ほんと迷惑だった。なんだかんだ僕はこいつが嫌いなのだ。

そんなわけで、僕が本城の家に行くことになった。

家が近くにあるので、住所を見れば大体道は分かる。どうやら僕の家からそうは遠くないようだ。

そりゃあ、同じ学区だったし…。
僕の家からは、数百メートルだった。

まず本城の家を見て思ったこと、
とりあえず、なんていうかな…、デカイ…。

敷地の周りを一周すると多分軽く運動になるんじゃないか？

こんな家近所にあつたんだな…。

そういえば本城って社長令嬢だったような、そんな噂を聞いた。

東京ドーム何個分とかいう敷地面積の表現方法、あれ田舎者の僕からしたら東京ドーム自体を見たことがないから実感がわかないのだ。
あの表現方法は僕は嫌いだ。

ちなみに僕の家は、古い木造アパート（家賃一万、風呂無し、トイレ共用）だったりする。

なんかインターホンを押すのに結構躊躇する…。
思い切って押してみる。

『ピンポン』

予想通りの機械音が聞こえる。

しばらくすると『どちら様でしょうか？』という声が返ってきた。

おそらく本城の母であろう人だった。

「本城さんのクラスメイトの雨宮と申します。本日は本城さんの件でお話したいことがあって来たんですが…」

『あ、はい、何でしょうか？』

「本城さんと今お話できますか？」

『あー、えーっと…、唯香ですか…、申し訳ないんですが、あの子部屋から出て来てくれないんです…。だから、ごめんなさい』

母親の話から要約すると部屋からも出ないほど病んでるらしい。これは僕がどうこうできるという範囲じゃない。

グレてるとかならまだしも、病んでるのは…僕の許容範囲じゃない。っていうか、本城の母親も母親で結構、切羽詰っている感じの雰囲気

気だったし…。

ここは引こうか…。

「そうですね…。では失礼しました」

そして僕は本城宅を後にすることにした。

僕は真つ直ぐ家に帰る予定だった。

実際のところは幽霊少女に捕まってしまったのだけれど。

幽霊。

僕は何故かそういうものが見えるのだ。

そんなところで僕は珍しい人種なんだろう。

みんなに羨ましがられるけど、正直いらないスキルだ。いや、なんと言っかね…、グロいから…。

たまにというか…、結構な確率で血まみれの女の人とか、首のない幽霊とかいるからな…。

これは僕の憶測だけど、死んだときの状態のままで出るんじゃないかな、と思う。

でもこの幽霊少女はそういう類じゃない、普通の、下手したら人間と間違えるくらいに普通にいそうな少女だ。

中学生くらいで身長は僕の肩くらいだから150cm弱だろうか？
こちら辺では見ないデザインのセーラー服を着ている。黒地に白のリボンのセーラー服だ。

髪はセミロングくらいで前髪は眉下で切りそろえられている。

前髪の直線がトレードマークです。と彼女は言っていた。

その少女は燈火と名乗った。

「これはこれは、雨宮さんじゃないですか。お久しぶりです」

「よ、燈火。そういえばお前に最近会ってなかったな…。三ヶ月ぶりか？ていうか、できるだけお前に会いたくなかったんだよ」

「なんでですか！？そんな酷いこと雨宮さんに言われるなんて…、そんなに私のことが嫌いですか？」

「いや、別にお前が嫌いとかじゃなくてさ、お前に会うと必ず四時間以上は立ち話しちゃうだろ。僕平日は学校あるし、暇がないんだ

よ」

中学のとき家庭学習なんて課題だけしかやってなかったからな。基本暇だった。

高校入ると家庭学習とかしないとマジで学校の授業がさっぱりになつてしまう。

部活もやらずにバイトでもしようかなーなんて甘い考えしてたら、最下位目前まで成績が下がったというオチ。

「私より学校が大事なんですか！？ふーんだ。どうせ私なんか、暇をもてあます下級幽霊ですよ」

ぷくーっと頬を膨らませていてどうやらご立腹のようで。

いや別にそういうわけじゃないんだが…。

ていうか、なんかこいつ、すごい可愛いぞ。

中学生のくせに頬を膨らませる仕種とか、可愛いすぎる。

なんて思ってしまう僕はロリコンの変態なのだろうか。

「ごめんごめん、僕が悪かった。だからそんな顔するなよ。なんていうか僕の変態さが読者の皆様に露見してしまう」

「はい？何のことですか？雨宮さんがロリコン変態なことくらい誰でも知っていると思いますけどねー」

え？僕がロリコンで変態なことみんな知ってるの！？

嘘だろ…？初期設定はクールな僕っ子だったはずだ！！

「まあその話はさておきですね。実は雨宮さんに一つ忠告いや、警告といいますかね、そのためにこうして雨宮さんを探していたわけですよ」

「え、お前って僕をサーチする能力とかあるの？」

「まあそうですね。大体感覚でわかります。雨宮さんが今日もクラスメイトの美人系性悪女子と戯れているなーとか、私を差し置いて何イチャコラしてんですか、雨宮さん」

「え？ちよっと待て、僕はイチャコラしてない！」

性悪女子と言ったら、あれしかないだろ？八白木だろ？違っし、

断じて違うし！

「私という恋人がいながらにしてそういうことをするんですか？ 雨宮さん最低です」

いや、待てよ…。

僕、お前の恋人じゃないし…。

「まあ、冗談はさておき、」

閑話及第。

「雨宮さんに警告があります。長くなるかもしれないので、雨宮さんのボロアパートでゆっくりと話しましょうか」

ボロは余計だ。なんて突っ込もうとか考えていたけれど、一瞬にしてそれは吹き飛んだ。

あの笑顔はっちゃんけ娘の顔が妙なくらいに、まるで“あの時”のよう
うに真剣だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301y/>

僕と幽霊少女と墮落日和

2011年11月26日20時56分発行